

ジヨゼフ・ヨアキムは生涯のほとんどを放浪者としてすごしました。黒人とネイティブアメリカン、そしてフランス系白人の血を引いた彼はアメリカのミズーリ州に生まれ、サーカス団に入ってアメリカ大陸を旅し、ヨーロッパにも遠征します。故郷に戻って結婚したのもつかの間、徴兵されて第一次世界大戦に出征し、そして戦争終結後もそのまま放浪の旅をつづけて、二度と故郷には戻りませんでした。

大戦から世界恐慌へと進んでいく激動の時代。彼の人生はホーボーそのものでした。二十世紀初頭の荒々しいアメリカ社会に登場してきたホーボーはつまりは放浪労働者。インフラが整備されつつあった鉄道網を使って無賃乗車で全米を旅し、日雇いの仕事をしながら移動し続けた人たちです。北米の広大無辺な大地を移動していく彼らの生き方がある種のロマンを生み出し、のちに「さすらい」をテーマにしたさまざまな小説や詩、音楽、絵画をアメリカ文化の中に生み出しました。ジャック・ケルアックの小説『オン・ザ・ロード』。ボブ・ディランの名曲『風に吹かれて』。映画『イージーライダー』。みんなその系譜です。

でもヨアキムは単なる放浪者。ミュージシャンでも作家でも画家でもありません。彼は人生のほとんどを市井の平凡な人として過ごし、家族やわずかな友人を除けばほとんどだれも彼に見向きもしてませんでした。八十歳近くになるまで、ただの名もない人だったのです。

でも彼は、ある一回だけの偶然の出会いから、いまにいたるまで名前を歴史に残しています。

↑放浪への憧憬をつのらせて

彼の人生をもう少しわしく追いかけてみましょう。

ヨアキムが生まれたのは十九世紀の終わりです。生年は諸説あってはっきりしませんが、一八九〇年ごろ。父は黒人とネイティブアメリカンの混血。母はフランス系の白人とネイティブアメリカン、黒人の血を引いています。その両親から生まれたヨアキムは実に複雑な民族的血統の末の子供でした。

彼は子供のころから絵を描くのを好み、つねづね「自分はナバホの血を引いてるんだ」というのが自慢でした。ナバホインディアンは美を愛し、部族の中の芸術家を厚く遇したことで知られています。「人間にとっての究極の使命は、美をつくりだし、その美にかこまれて生きることだ」というのはナバホの教え。

もともとヨアキムは実はチェロキーとクリーク族の末裔まつえいで、実際にはナバホの血は引いてなかったようですが。

ヨアキムの人生は、旅から旅への放浪でした。生家は貧困にまみれていました。彼が生まれたころ、アメリカの中西部は深刻な干ばつに襲われ、農地の収穫量は激減し、家や土地を借金  
の抵当に入れていた多くの農夫たちは故郷を追われていったのです。鉄道員から農業に転じた

ヨアキムの父も、この悲惨な物語の例外ではありませんでした。

ヨアキムは九歳になるころにはもう家を出て、サーカス団で馬の鞍を磨く仕事をするようになります。父親から十九世紀なかばの鉄道ブームの時代、鉄道員として旅から旅へと移動することの自由さ、楽しさ、鉄道への愛を聞かされていて、放浪への憧憬をつのらせていたこともあり、ヨアキムはやがて、多くのサーカス団を転々として、北米をくまなく旅するようになります。仕事もまもなく、鞍磨きからポスター貼りへと昇格しました。

サーカス団は居心地のいい場所でした。寛大で、公平で、自由な人たち。厳しい野外生活を営み、厳しい労働を強いられ、だからこそ団結力の強い仲間たち。ヨアキムは、ハンサムで頭の回転が速く、機敏な若者へと成長していきます。

サーカスの仲間たちと移動していくアメリカの荒々しい大地。

岩だらけの風景。

深い針葉樹の森。

遠い地平線。

彼はやがて海外にも出て行きます。イギリス、北イタリア、南ドイツ、オーストリア、バルカン半島のモンテネグロ、ロシア、そして中国。中南米。そうした異国の土地の風景は、彼の脳裏に強く焼き付けられました。

十八歳のころに彼は実家に戻り、マートルという近所の農夫の娘と結婚しました。二歳年上の姉さん女房で、今でいう「できちゃった婚」です。

結婚して最初の四年に三人の子供が産まれますが、生活は極端に苦しい日々でした。おまけに大規模な洪水が彼の住んでいた一帯を覆い、しかも当時黒人の就労は制限されていて、農業以外の良い仕事にはほとんど就けませんでした。溝掘りや道路づくり、溶鉱炉のかまたき、採石場での石運び、炭鉱掘り……。そんな仕事しかなかったのです。

↑戦地へ

一九一四年、第一次世界大戦が勃発します。二十四歳のヨアキムも徴兵され、アメリカから集められた七四万人の新兵のひとりとして軍隊に入隊します。

しかし軍隊でも黒人の地位はきわめて低く抑えられていました。黒人兵の大半は工兵や荷役の部隊に所属させられていて、軍隊内における「日雇い労働」のようなものになわされていたのでした。

ヨアキムは第八〇五工兵隊に所属し、最前線のすぐ後ろで道路や橋、線路の建設と補修にあたりました。爆撃でダメージを受けた道路を直している途中に、ドイツ空軍が猛烈な爆撃を仕掛けてきたこともあります。防御手段もなく傷ついた兵が移送もされないまま放置され、それで

もヨアキムの部隊はみんなで歌をうたいながら、爆弾が次々と落ちてくる中で一晩中道路を補修しつづけたのでした。朝には白人たちの部隊が道路を通れるようにするため――。

その様子を見て、白人兵たちはあっけにとられました。

「よくこんな酷い場所で歌なんか歌えるな」

黒人兵たちは白人たちからひどい扱いを受けていました。「オレたちを犬のように扱うな！」と白人上官にひとこと叫んだだけで、三カ月の重労働を命じられた黒人兵もいました。

ヨアキムもフランス駐留中と同じような体験をしています。水運びという面倒な仕事をさせられ、しかもその仕事を命じた白人の下士官がのんびり寝転がって休憩しているのを見て、思わず怒鳴ってしまったのです。

「おいそこで寝っ転がってるヤツ、俺は自分の仕事分はもうやり終えたぜ。俺にもっと水を運ばせたいんなら、まず営倉えいそうにぶち込みな。そのかわりこの軍隊からおん出たらずぐにお前を見つけてやっつけてやるからな」

彼は即刻軍事裁判にかけられ、六カ月の重労働の刑と給料の三分の二のカットを科せられました。

そんな軍隊での屈辱的なできごとにかかわらず、ヨーロッパでの軍隊経験は彼の放浪熱に再び火を付けました。

彼は放浪にそのまま出かけ、戦争が終わってからも妻子のいる家には戻らなかったのです。生まれながらの孤立主義者だったといえばいいのでしょうか。彼はその後、十八年間にわたって妻や子供たちと連絡を絶ってしまふことになります。

これはヨアキムの子供たちにもたいへんなトラウマになり、母が再婚した時には子供たちはすかさず再婚相手の苗字を名乗ったほどでした。息子たちが父の気持ちを理解できるようになるまでには、長い年月を要しました。

ヨアキムの晩年、彼の長男のジョンはついに父親を許して、こう話すようになりました。

「親父はインディアンなんだ。だれかの家の屋根の下では暮らせないのさ」

第一次世界大戦が終わった後の一九二〇年代、ヨアキムはアメリカ中を放浪し、いろんな仕事に就きました。鉄道の用務員、リングゴのもぎ取り、商船の船員。

#### ↑七十歳、絵に目覚める

そして二〇年代終わりごろ、彼は最終的にオハイオ州のシンシナティ付近にやってきました。ここで大きな印刷会社がサーカスのポスターを印刷していて、そこで雇われたのです。数年後にはシカゴに落ち着き、そしてこの街が彼の安息の地となります。

長い放浪生活は終わったのでした。

彼はシカゴで守衛や自動車整備工、大工、鑄物工場の工員などやはり仕事を転々として、フロイという女性とも再婚します。そうして最後にはシカゴの街の片隅でアイスクリーム屋を開業します。

しかし第二次世界大戦が終わるころ、彼は精神の病を発症し、軍病院に入院を余儀なくされました。まもなく妻も亡くなり、以降、彼は仕事を辞めてわずかな軍人年金と失業保険でひっそりと暮らすようになりました。

彼が絵を描きはじめてのは、七十歳を過ぎてからです。

夢の中でレバノンの街の光景を見て、目覚めてからその光景を絵に残そうと思ったのがきっかけでした。以降、彼は若いころに旅した北米の荒れた風景を中心に精力的に絵を描くようになります。

木立の並ぶ丘や、曲がりくねった海、するどく尖った山などをていねいな細い線と、大胆なフォルムで構成していききました。

その絵を売ろうとか、アーティストになろうとか思っていたわけではありません。ただ七十歳を超えて老境に達し、過去の追憶の中にある心象風景を自分自身の手で絵として固定したい、そういうすなおな気持ちだけが彼を突き動かしていたのでした。

彼はシカゴのサウスサイド八二番街にあった雑居ビルに住んでいました。テレビ修理店やク

リーニング店、美容院などが軒を並べるこのビルに、こぢんまりとした二部屋続きのアパートを借りていたのです。廊下にはカーテンが掛けられ、狭苦しく薄暗いリビングルーム兼制作スペースと、寝室と台所部分を分けていました。リビングにはふたつのソファと、色褪せたトルコ風のファブリックでくるまれた安楽椅子。それに古いテレビと、金属の作業台。本棚。積み重ねられた絵。ガラクタの山。

彼は絵を描くと、洗濯ばさみで窓ガラスにぶら下げていました。通りがかる人がだれでも見られるようにと、そうしていたのです。

↑「これはたいへんな発見だ！」

そんなある日、ある人物がヨアキムの家の前を通りがかりました。

シカゴ大学でカフェを経営していたジョン・ホップグッド。彼は長老派教会の牧師でもありました。

窓にぶら下がっていたヨアキムの絵に彼は目を止め、思わず立ち止まります。

丘と樹木の描き方が、いっぷう変わっていたのが気になったからです。

人類学の素養があったホップグッドは、ヨアキムの絵に「プレコロンビアン」と似た要素があることに気づいたのです。プレコロンビアンというのは、コロンブスがアメリカ大陸に到着

した十五世紀以前の時代のこと。メキシコの古代文明やマヤ文明、アンデス文明などを含めた先住民の時代です。この時代のプリミティブな芸術性が、ヨアキムの絵の中に共通しているとホップグッドは考え、

「私はたいへんな発見をしたのかもしれない」

とひとり興奮したのです。彼はその場でヨアキムの絵を二二点も購入し、そして彼に「自分のカフェで個展をやらぬか」と勧めました。

ヨアキムにはなんのことだかよくわかりませんでした。が、むろん異論はありません。そうして彼らは展覧会を企画して四〇点の作品を展示し、なんと驚くべきことに最初の四週間でうち三〇点売れてしまいました。

ギャラクシープレスという出版社の社主トム・ブランドが展覧会を訪れ、これがヨアキムがシカゴのメインストリートのアートシーンにデビューするきっかけになりました。画家でもあったブランドはヨアキムの作品の風変わりな心象風景と見事な反復的描画、不思議な遠近法にノックアウトされたのです。

ブランドはヨアキムの作品に触れた驚きを、シカゴの芸術界の友人たちに触れてまわりました。その中にはシカゴデイリーニューズ紙の記者ノーマン・マークもいて、彼はヨアキムの展覧会をさっそく記事にし、その中で抽象絵画の画家ジョーダン・デイヴィスのこんなコメント

を紹介しました。

「ジョゼフ・ヨアキム。彼の作品はグランマ・モーゼスよりずっと素晴らしい」

グランマ・モーゼスというのやはり七十歳を過ぎてから絵を描きはじめての女性で、アメリカの古き良き風景を描いてアメリカ人から圧倒的人気を集めた画家です。

ヨアキムは彼の鮮烈な絵のほとんどを、若いころの旅の時代の追憶から生みだしました。彼は八十代で亡くなるまでのとても短い晩年に、二〇〇〇点もの作品を遺しています。

死後、遺作展はニューヨークの著名なミュージアムであるホイットニー美術館で開催されました。気がつけば彼は圧倒的な名声を誇る芸術家として、歴史に名を残していたのでした。

晩年、ヨアキムはこんなふうに述懐しています。

「わたしが描いた絵に価値があるなんて、まったく想像もしてなかったよ」

↑つくる人と見いだす人の新しい関係

あたりまえのことですが、ヨアキム自身も、自分の作品の価値にはなんら意味を見いだしていません。彼の作品がアートとして認められるようになったのは、カフェオーナーのジョン・ホップグッドが偶然彼の家の前を通りがかって彼の絵を見いだしたからでした。

もしホップグッドが偶然通りがからなかったら？

ヨアキムはだれにも発見されず、ごく平凡なひとりの老人として余生を終わらせていたかもしれませぬ。もちろんそれでも彼は、きっと幸せだったでしょう。

でも見いだされたことで、彼は平凡な老人から素晴らしいアーティストに突然なった。本人が「アーティストになろう」と努力なんかいっさいしていなかったのにもかかわらず。

そう考えると、ヨアキムの作品というアートは、ヨアキムだけでなく、彼を見いだしたホップグッドとの「共同制作」だったともいえるでしょう。

つくる人と、それを見いだす人。

その二人の関係。

つくる人がいなければ、もちろんだれかに見いだされることもない。でも見いだされなければ、つくるものは決してだれにも知られない。私たちが「何かを見る」「何かを楽しむ」というとき、つねにそこには「つくる」と「見いだす」という二つの行為が介在している。

絵の世界では昔は「美術をちゃんと学習している人」「美術の技術を習得している人」「そのときどきの美術史の流れがわかっていて自分の作品を発表する人」というようなプロフェッショナルがつくり手のほとんどを占めていました。ところが二十世紀に入るころから、ヨアキムのような「美術を学んでない」「技術も習得してない」「美術史のことなど何も知らない」、そ

れに加えて「自分の絵を世間に大々的に発表したいという気持ちなんて全然ない」というような人たちがたくさん現れてきて、こうした人たちの絵が美術界で認められるというようなことが起きてきています。

プロじゃない人たちが、つくり手になる時代になってきているのです。

これはどんな世界でも同じ。そしてインターネットが普及して、「プロじゃない人」の表現や発信はますます増えています、そういう人たちのつくったものが認められるというようなことが世界中で起きている。

そういう世界では、良い芸術作品や良い文章や良い楽曲を生み出すためには、「つくる人」がいるだけでは難しい。

ヨアキムをホップグッドが見いだしたように、それらのすばらしい作品を「見いだす人」が必要なのです。

これからの世界は、そうやって「つくる人」と「見いだす人」がお互いに認め合いながら、ひとつの場を一緒につくるようにして共同作業をしていく。

この本は、そういう新しい関係が私たちの社会を変えていくということを書いています。